

かきねのかきねの まがりかど  
たき火たき火だ 落ち葉たき  
童謡『たきひ』の作詞者の翼聖歌  
（たつみせいか）（一九〇五）七  
三）は、私の出身地の岩手県紫波  
町の名誉町民です。

巽氏は、鈴木三重吉の主宰する  
『赤い鳥』に作品『水口』が載り  
ました。『赤い鳥』は、世俗的な  
下卑た子どもの読み物を排除して  
純麗な読み物を授けるためにでき  
ました。彼は北原白秋に師事し、  
新美南吉を童話作家として世に見  
出した人でもありました。

それゆえ私は、ライフワークと  
して彼を研究して小説にでもまと  
めようかなと考えています。

さて、私と吉永先生の出会いは平成六年、筑波大学附属小学校で説明文の授業を参観した時からです。その日は暑い中の授業でした。でも先生は、いい教材『季節とわたし』を準備して実にうまい授業を私たちに公開してくれました。また平成十年に、「新しい国語実践」の研究会が山梨県河口湖であり、一緒にさせていただきました。私は、青森県の郡小国研で先生の著作の『京女式ノート指導術』を会員に勧めました。とても分かりやすく、授業づくりに役立つことを紹介しました。

「国語教育は人間力」という先生のこの考えに共感しています。

でも青木先生のように教材研究として筆で教材文を視写するまではできませんでした。

# 童謡『たきび』の町

# 国語教室

また、「さざなみ国語教室」はなんと五一〇号の発行。まさに驚異的です。青木幹勇先生の『国語教室』でも一〇〇号なのに、  
ところで私は、吉永先生を中心  
に研究会があるのがとても羨まし  
いです。今後私も一緒に学びたい  
と思っています。

▼ 知人から奥さんへ。病院での体験談を聞いた。病気がちで整形外科に通う奥さんは、診察のたびに医師から丁寧な説明を受けた。原因をや工夫の仕方、日常生活での注意点まで、患者が納得できるよう一つひとつ言葉を尽くしてくれる。そうだった。帰宅した奥さんは、その内容をわかりやすく夫に伝え、自身の健康管理に役立てている。知人は「話を聞いただけなのに、明日何をするべきかがはつきりわかる」と、その話し方に深く感心している。と、その話し方に深く感心している。▼この話を聞きながら、授業の様子を思い浮かべた。子供たちは家で、学校において学んだことをどれほど語れるだろうかと。『今日は算数を勉強したよ』と教科名だけを話す子。「僕の意見を先生が分かりやすいと言つてくれたよ。それはね。』と具体的に話す子もいる。「特になし」と言う子も珍しくない。▼知人の奥さんの例で言えば、医師は相手が理解し、質問したくなるように具体的に方法や意味を伝える工夫をしているとのこと。同じように、授業も「子供が自分で自分の言葉で話せるか」を意識して授業計画を考えたい。

『くじらぐも』の振り返り  
川部 長人

『くじらぐも』の単元が終わり、子どもたちと一緒に振り返りの時間もった。黒板いっぱいに広がった子どもたちの言葉は、まるで空に浮かぶ雲のように自由で、のびやかだった。今回の単元では「おもいからべながら読もう」というテーマのもと、音読や視写を通して、物語の世界に入り込みながら、自分の感じたことや考えたことを言葉にすることを大切にしてきた。

振り返りの板書には、「ことばのふくろにあたらしい」とばをたくさんみつけられた」「かぎかっこ（「」）をつかって、とうじょうじんぶつがはなしているところをかくことができた」など、子どもたちが自分の学びを具体的に言葉にしている様子が見られた。特に印象的だったのは、「天までとどけ、『一、二、三』のところをがんばった」という声が多くあつたことだ。音読の場面で、跳ぶ高さに合わせて声の大きさを変える工夫をしたことが、子どもたちの中で強く残っていたようだった。また、子どもたちにとって、音読は「できる・できない」ではなく、「どう読めば伝わるか」を考える活動へと変わりつつある。これは

『くじらぐも』の単元が終わり、子どもたちと一緒に振り返りの時間もった。黒板いっぱいに広がった子どもたちの言葉は、まるで空に浮かぶ雲のように自由で、のびやかだった。今回の単元では「おもいからべながら読もう」という

この単元では、視写の学習を通して「書かれている文章にこだわって話す」姿が多く見られた。例え、「三十七センチ」「五十七センチ」「空まで」と跳ぶ高さが変化する描写に注目し、「だから声もだんだん大きくなる」といった読み方の工夫が生まれた。こうした言葉へのこだわりは、視写によって文章を丁寧に読み取る力が育つたからこそだと感じている。

また、振り返りの中には、「ついに字をかくのをがんばった」「プリントにうつす、ししゃをがんばった」といった言葉もあった。これは、学びの過程そのものを大切にしている証だと思う。ただ読む・書くのではなく、どう読んだか、どう書いたかを自分の言葉で振り返ることができるようになつてきた。

『くじらぐも』の実践を終えて、子どもたちは言葉の力を少しずつ身につけている。これからも、物語の世界に入り込みながら、自分の感じたことを自分の言葉で語ることができるようになっていきたい。振り返りの黒板に並んだ言葉の一つひとつが、子どもたちの成長の証であり、次の学びへの力になっていくと信じている。

(湖南省立菩提寺小学校)

「実感」から学ぶ  
井上 混斗

説明文の学習は、情報を正確に受け取り、活用する力を養う重要な機会である。そこで本学級では、教科書教材「紙コップ花火の作り方（まつばやしさわこ作り）」を軸に、あえて「わかりにくい説明書」と比較させる活動を取り入れ、言葉の選び方や構成の重要性を実感させる指導を試みた。まず、教師が作成した不完全な説明書①「写真が抜けている」を提示し、実際に紙コップ花火を作り、実際に紙コップ花火を作らせた。児童からはすぐに「これじゃわからない」「どこを切ればいいの？」といった困惑の声が上がった。この「作れない」という切実な経験を起点とし、段階を追つて改善版の説明書を提示していく手法をとった。

次に、②「写真の下に説明の文章がない」ものを見せ、視線の誘導の大切さを確認した。続いて、③「表現があいまい」なものを通じて正確な語彙の必要性を、④「順序を示す言葉と小見出しが抜けている」ものを通して文章構造の重要性を、それぞれ検討させた。

最後に、全ての工夫が凝縮された「まつばやしさんの説明書」を提示した際、児童からは「全然違う！」「これなら絶対作れる」と、驚きと納得の声が上がった。欠陥

のある文章との比較を繰り返したことで、教科書の文章に隠された「わかりやすさの工夫」を、児童が自ら発見していく姿が見られた。

(豊郷町立日栄小学校)

本文が掲載されている教科書は、閉じておいて、代わりに、年下（光村図書）を扱つた学習。二年生の教室。大久保ティ子さんの詩「ねこのこ」（光村図書）を扱つた学習。年下（光村図書）を扱つた学習。二年生の教室。大久保ティ子さんも言葉を考えたけれど、そして、他の伏せた部分を各々で考える時間をとつた。その際、ティ子さんも言葉を考えたけれど、と問うと、「にやああん」「ふああん」「あわあわ」等と出された。そして、他の伏せた部分を各々で考える時間をとつた。その際、ティ子さんも言葉を考えたけれど、

ね」の」「しかられて( )」  
岡嶋 大輔

「言葉」で、あることを話した。その後、一行ずつ、伏せた部分について言葉を出し合つた。学級順の大半の子が挙手したので、席の順に私の呼名後、発表していき、そのぞれについて私が一言コメントを付していくといつたように、トを付して、拳手した全員が発表できるよう、テンポアップして進めていった。とえば、「しかられて」の後の言葉。「にやおん」「にやん」「しょんぱり」「しやあしやあ」「ふええん」「ふるぶる」「ふうふう」といったように、子猫等と云つたように出された。私が叱られて、驚いたり、恐れたり、悲しんだり、怒つたり、しゆんとしたりと、その様子を様々に想像して、いることが伝わってくる。私は怒つているの?」「びくつ」と云つてなるの、分かるねえ。」と云つたように、確認したり、補足したりして、いつに、そのコメントをしながら、発表者に注目を集めたり、出された言葉に意味付けをしたり、聞いている子らの想像を助けたりできると感じた。そして、「しかられて」で、ティ子さんはどう表現したか。私が黒板にゆつくり「しゅん」と書くと、「自分と似ている」「同じ」「しくん」と云ふと云ふのか」といったように、様々な言葉が、出されたこと自体が、学びとなつた。ティ子さんが選んだ言葉のよさに気付け、みんなの言葉の選び方も、それぞれの一つの言葉か、様々な言葉が、出されたこと自体が、学びとなつた。それと、同じぐらいの言葉をみんなに伝えて、この詩を扱つた。学習を終えた。

の中で行つたことや、見聞きした出来事などから、書くことを見つけてきた。また、説明文を学習した後には、図鑑や他の絵本などを参考にして、本文をまねながら簡単にお話を作り、友だちと交流してきた。

今回も「いろいろなふね」の説明文を学習した後に、自分で調べてみたいのりものについて、「のりものカード」を書き、友達と交流する学習を計画した。

まず、説明文「いろいろなふね」を文章のモデルとするためには、説明文の簡単な構成を見つけることが大事である。「いろいろなふね」で繰り返された「やく目」と「つくり」についての書きぶりをもとに、して、ほかの船についての簡単な説明文を書くことにした。例えば、かもつせん、タンカー、はんせんなどについて、図鑑や絵本で調べ、本文をまねながら話を書いた。どの子も、書き方がわかつていたので、二つ、三つとお話を書くことができた。これを足がかりにして、自分の調べたい乗り物を決め、図鑑や絵本などで「やく目」や「つくり」などについて調べて文章を書き、さし絵も入れて「のりものカード」を作つていった。

「いろいろなふね」の構成をまねれば容易に書くことができると思

いろいろな乗り物のことが知れて、楽しくなってきたようである。同じような乗り物について書いている友達がいれば、書いている途中でも読み合ったりして、自分のカードを見直している姿も見られた。ほとんどの子が、何まいもカードを書いていた。その中で、特に、友達に紹介したいものを一つ選んで、厚紙に清書し、教室に掲示した。今まで、書くことに消極的だった子も、進んで友達の「のりものカード」を読んで、「○○んな車があるのか。すごいね。」「お父さんのお仕事の車を書いたよ。みんな、わかつてくれるかな。」「○○さんのカードは、お話を絵も、わかりやすいね。今度書く時、まねしよう。」など、友達のカードのよいところを見つけもでき、よい交流となつた。学習参観の日の時まで掲示しておいたので、保護者の方にも見てもらうことができ効果的であった。保護者の方から、次のような感想をいただいた。

◇たくさんののりものについて、いろいろなふねや車のことなど、やくめやおしごとをしつかりかんがえることができたね。えもいっぱいかいて、とつてもわかりやすかつたよ。

◇いろいろしらべられたね。いいべきょうがいっぱいできたね。

(東近江市立湖東第一小学校)

## 視写を大切に

心に残った文や言葉、知つてよかつた情報などは、日頃から書き留めておきたいと思う。国語の学習においても、音読と並んで視写は重要な学習だと考える。

※そうすれば、楽器を作ること  
この三つが必ず挙がってくる。どれも、スーホと白馬との固いつな  
がりを表す、心に残る文である。この三文のみを手がかりにして、  
学習を進めることもできる。  
その他にも「すきなところ」は、たくさん見つかるのだが、自分で  
見つけたすきなところをきちんと  
視写できていれば、学習はOKだ  
と考えてもよい。

②松井さんらしさを見つけよう  
「白いぼうし」(四年生)

中学年では、自分の考え方の根柢  
を明確にするために、視写を取り  
入れたい。三年生では、とにかく  
視写をした文を増やすことに、う

・小さなことにもよく気が付く。  
・相手が悲しまないよう何とか  
したい。  
・松井さんは、やさしいからちよ  
うの声が聞こえるのだ。  
「松井さんは、やさしい」と、一  
言で片づけるのではなく、やさし  
さにもいろいろなとらえ方がある  
と、気づくことができた。  
③すてきな表現を見つけよう  
「海の命」(六年生)  
高学年になると、文章表現その  
もののよさに目を向けるようにな  
る。美しい言葉、心に残る文など  
である。素晴らしい言葉が、自分  
の考え方や生き方に影響を与える  
こともある。そのような表現に出

①すきなところを見つけよう  
「スーウの白い馬」(二年生)  
低学年では、正しくていねいに  
書く習慣をつけたい。「スーウの  
白い馬」を読んで、すきなところ  
を尋ねると、  
「これから先、どんなときでも、  
ぼくはおまえといつしょだよ。」  
「走つて、走つて、走りつづけて、  
大好きなスーウのところへ帰つて  
きたのです。」  
「そうすれば、わたしは、いつで  
もあなたのそばにいられますか  
ら。」

れしさを感じる子も多い。四年生では、視写した文や言葉をつなげて考えることもできるようになる。

「白いぼうし」を一読後、感想を尋ねると、「松井さんってやさしいね。」という感想をもつ子が多い。その他、女の子と白いちょうどの関係から、不思議さに目を向ける子もある。

1. 音読や黙読を通して、物語の大体をつかむ。
2. 自分の考えの手がかり、根拠となる言葉や文を視写する。
3. 自分の考えをつくり、友だちと交流する。
4. 交流を通して学んだことと合わせて自分の考えをまとめる。非常に単調な学習過程ではあるが、この1から4のことが確実にできるようになれば、国語の力は自然とついてくる。そして、音読と視写が大切なのだ、と気づく子どもを育てたい。国語の学習に派手さはいらないと、最近は思うようになつた。

- 会つたら、ぜひとも書き留めておいてほしい。

「海の命」には、(いいなあ)と思う表現がたくさんある。

「海のめぐみだからなあ。」

「千びきに一びきでいいんだ。千びきいるうち一びきをつれば、ずっとこの海でいきていいよ。」

「おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。」

なんとなくかつこいい表現だとは分かるのだが、そこにこめられた意味は、よく考へないと自分なりの答えは見つからない。そこには、漁師として受け継いできた何かが隠されている。物語の冒頭部分、「父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に：」

子どもたちが、この表現に目を向けなかつたならば、どんなことをも知らない父親たちが住んでいた海に：」

編集後記

二四

(吉永幸司)